

## 下領八幡宮と廣岡浪秀

学校うらの下領八幡宮は、本当の名前を「八幡摩能峰宮（やはたうすのみねぐう）」と言います。この境内にある顕彰碑には「贈従五位 廣岡正恭之碑」と書かれています。廣岡正恭とは、維新の志士「廣岡浪秀（ひろおかなみほ）」のことです。廣岡浪秀は、1841年に下領八幡宮宮司の長男として生まれ、幕末の志士として活躍した人物です。



廣岡浪秀は、父の跡を継ぎ宮司となるために学問を必要としたので、1856年に、国学神典の権威者であった徳山の遠石八幡宮宮司の指導を受けるため、徳山に向かいました。彼が16歳の時です。折しもこの年、萩では自宅謹慎中の吉田松陰が松下村塾での講義を許されていました。日本が和親条約を結んだ直後であったこの時期、いたるところで開国論と攘夷論が論議されていたそうです。このような中で、徳山でも同じような論議がさかんになされたものと思われます。

1858年に大老職となった井伊直弼は、翌年、政治のやり方への反対論者たちを次々に処罰しました。松陰もこのときに捕らえられ、処刑されました。こうした幕府のやり方に攘夷派の志士たちは、敵意をむき出しにするようになり、1860年、桜田門外で井伊大老は水戸藩の浪士たちに暗殺されます。このことで混乱をきたした幕府は、孝明天皇の妹、和宮と14代将軍家茂との政略結婚を計画し、公武合体を進めようとしていました。こうした中、1861年に憂国の心情に燃えた浪秀は、徳山から一旦下領に戻ります。

長州藩内では、一時は幕府の公武合体策を受け入れる動きがありましたが、1862年1月に起こった坂下門外の変により、幕府の威信が低落したことをきっかけにして、尊攘派の主張が大多数をしめるようになります。そしてその年の3月、当時22歳であった浪秀は、故郷大嶺を出て、一路京都へと旅立ちました。

その後、長州藩の尊攘活動は一段と激しくなります。1863年5月には、馬関海峡を通過するアメリカ商船ベンプローク号攻撃。ついで、フランス商船、オランダ軍艦を次々に砲撃しました。宣戦布告もない攻撃で、相手国たちは大いに驚いたようです。（これが翌年、四か国連合艦隊の下関砲撃～馬関戦争へとつながっていきます。ちなみに、このときにフランス軍が戦利品として長州藩の青銅砲を持ち帰りました。）

さて、その頃、京都でも、長州藩のテロ活動が横行しました。幕府はこれをおさえるため、京都守護職を設け、治安の維持を図るとともに、新撰組をその配下に置きました。そして、1863年8月18日、突如長州藩は京都から追い出されることとなります（八・一八の政変）。この時、長州藩に協力的だった七人の公家たちも長州へと避難します（いわゆる七卿落です）。長州藩内には尊攘派に反対する俗論派もいたため、旧豊北町の田耕で隠れ潜んでいた七卿の1人、中山忠光は山中で暗殺され、綾羅木海岸で発見されました。忠光は19歳でした。現在、その場所には「中山神社」が建てられています。

ちなみに満州国最後の皇帝・愛新覚羅溥儀の弟、溥傑に嫁いだ嵯峨家出身の浩は、忠光の曾孫にあたります。そのため、中山神社には、「愛新覚羅社」という神社も併設され、二人もここに眠っています。



さてさて、浪秀の行った京都では、桂小五郎、久坂玄瑞、吉田稔磨ら多くの志士たちが長州藩邸に出入りし、長州藩の失地回復に努めていました。その中に浪秀もいたのです。しかしながら、当時の京都では、長州人とわかると、斬り捨てられるか捕縛されるという状況でしたので、浪秀も「廣分彦也」と変名していたそうです。

1864年5月、尊攘派の一人である古高俊太郎が新撰組に捕らえられ、尋問されました。拷問にかけられた彼は、長州藩が失地回復のために、武力をもって上京し、強訴することや、京都守護職であった松平容保（会津藩主で、明治になって日光東照宮宮司になった人）を斬ることなどを密議していると話してしまいます。これを知った容保はたいへん驚き、新撰組に出勤命令を出しました。

6月5日、京都三条の「池田屋」という旅籠で、浪秀たち長州藩の志士を含めた尊攘派30数人の志士が密議を行っていました。古高が捕らえられたことを知っていた浪秀は、この密議の中止を申し立てましたが、肥後の宮部鼎蔵（ていぞう）から、「古高が計画をもらすわけではない」と言われ、密議が強行されたそうです。（桂小五郎もこの密議に参加する予定でしたが、ある事情で参加できなかったということです。）

午後10時頃、密議を終えた一同は懇親の酒宴をもちますが、この時刻に合わせるかのように、新撰組隊長、近藤勇が10人ばかりの隊員を率いて斬り込んできました。宴会場は一瞬にして修羅場と化し、暗闇の中の斬り合いが始まりました。そのうち土方歳三たちの援軍も加わり、池田屋にいた尊攘派たちは壊滅的な被害を受けました。

浪秀は、負傷を負い、助けを求めて脱出し、長州藩邸近くまで這っていきましたが、追手により、遂に三条河原の路上で息絶えました。このとき浪秀は24歳でした。

この事件により、長州藩の尊攘派は激怒。京都へと進軍するも禁門の変で敗退。同年1月には高杉晋作が功山寺で挙兵し、長州藩による本格的な倒幕運動へと時代は動いていきました。

1915年、大正4年になって廣岡浪秀に国から従五位が贈られ、翌年、下領神社の境内に顕彰碑が建立されました。

広岡家は、神社の東側にあり、浪秀の末裔にあたる八幡摩能峰宮名誉宮司の廣岡正敏氏は、昨年秋までご健在でした。

また、現在の宮司である宮崎匡敬氏も浪秀の遠縁にあたられるそうです。

ちなみに、池田屋の跡地は現在パチンコ店になっています。



広岡浪秀の顕彰碑

#### 【参考文献】

- 美祢地方歴史物語（瀬戸内物産出版部 1993年）
- ふるさとの歴史 美祢（美祢市立図書館発行 1969年）
- 幕末の志士 廣岡浪秀の奔走（利重 忠 2001年）
- 美祢市史（美祢市史編集委員会編 1982年）
- 中山忠光と長州（西嶋量三郎 1989年）
- 長州歴史散歩（古川 薫 1968年）